

底魚資源調査（夏季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、平成15年から漁業調査指導船いばらき丸（224t）により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回は令和8年7～8月に実施した夏季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

平成28年度から今年度までの現存量の推定結果を表1に示しました。資源水準については過去20年の調査で推定された現存量と比較して、今回の現存量が上位75%以上であれば高位、25%以上75%未満を中位、25%未満を低位としました。マコガレイ、ムシガレイについては浅海域における現存量を正確に評価できないため、「茨城県産重要魚類の生態と資源」（令和8年3月更新、水試HP）で報告している資源水準としました。直近5年間の推定現存量の推移を元に、漁獲対象種の推定現存量の増減傾向（以下、増減傾向という）を判定した結果、増加傾向にあるのはアオメエソ（めひかり）、チゴダラ（どんこ）、マダラ、アカムツの4種、横ばい傾向にあるのはヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、ヤナギダコ（水だこ）、ユメカサゴ（のどぐろ）、など8種、減少傾向にあるのは、マコガレイ（本まこ）、ムシガレイ、ミギガレイ（にくもち）、キチジ（あかじ）の4種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）は減少傾向、テナガダラ（とうじん）は横ばい傾向でした。

表1 推定現存量の推移（夏季トロール調査）

表 現存量の推移（夏季トロール調査）														（単位：トン）	
	魚種/年度	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	増減傾向	水準	過去10年平均
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ	127	71	64	45	27	23	28	48	13	30	27	横ばい	中位	48
	ババガレイ（なめた）	96	79	70	49	25	17	52	77	27	11	87	横ばい	高位	51
	アカガレイ（赤がれい）	109	29	10	1	2	1	0	1	0	0	15	横ばい	中位	14
	マコガレイ（本まこ）	29	26	19	50	14	18	5	6	0	1	1	減少	低位	17
	マガレイ（沖まこ）	62	77	1	0	1	0	0	0	0	0	0	横ばい	低位	16
	ムシガレイ	135	155	92	152	115	228	143	245	95	98	54	減少	中位	135
	ミギガレイ（にくもち）	162	111	105	85	36	46	77	53	37	28	25	減少	低位	73
	ヤナギダコ（水だこ）	199	217	270	111	68	77	57	244	120	14	69	横ばい	低位	148
	アオメエソ（めひかり）	312	193	260	57	110	160	191	585	463	262	1,381	増加	高位	240
	チゴダラ（どんこ）	387	242	151	157	130	223	80	227	99	131	289	増加	高位	180
	マダラ	142	16	56	3	4	0	2	15	1	0	13	増加	中位	35
	アカムツ	22	23	14	24	15	13	13	23	19	20	87	増加	高位	19
	ユメカサゴ（のどぐろ）	32	111	189	78	30	37	70	79	98	41	85	横ばい	高位	72
	キチジ（あかじ）	46	35	8	2	23	9	4	23	2	1	1	減少	低位	17
参考	マアナゴ	48	31	35	19	26	20	7	23	4	4	13	横ばい	中位	23
	マトウダイ	70	34	5	29	17	18	20	33	7	16	16	横ばい	中位	25
	トラザメ（ねこざめ）	960	1,603	1,231	1,629	1,027	1,077	385	290	197	284	27	減少	－	891
	テナガダラ（とうじん）	1,126	907	1,113	2,116	340	1,210	1,937	507	157	1,186	198	横ばい	－	1,560
	スルメイカ	37	26	58	15	25	14	1	31	57	26	40	増加	－	29

2 今年度と昨年度調査結果の比較

今年度と昨年度（令和7年度）の調査時に行った増減傾向の判定結果を比較した結果、アカムツは昨年度同様に増加傾向であり、アオメエソ（めひかり）、チゴダラ（どんこ）、マダラが横ばいから増加に転じました（表2）。また、ババガレイ（なめた）、アカガレイ、マアナゴ、マトウダイでは推定現存量の増加に伴って傾向が減少から横ばいに転じました。昨年度は一昨年度に比べて横ばいや減少を示す魚種が多くなりましたが、今年度は増加を示す魚種が多くなりました。

これらの増減要因を解明していくため、水産試験場では今後も資源動向のモニタリングを継続していくとともに、資源の持続的な利用に向けて調査研究を進めていきます。

表2 R7年度とR8年度の傾向の比較

	魚種/年度	R7傾向	R8傾向
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ	横ばい	横ばい
	ババガレイ（なめた）	減少	横ばい
	アカガレイ（赤がれい）	減少	横ばい
	マコガレイ（本まこ）	減少	減少
	マガレイ（沖まこ）	減少	横ばい
	ムシガレイ	減少	減少
	ミギガレイ（にくもち）	減少	減少
	ヤナギダコ（水だこ）	横ばい	横ばい
	アオメエソ（めひかり）	横ばい	増加
	チゴダラ（どんこ）	横ばい	増加
	マダラ	横ばい	増加
	アカムツ	増加	増加
	ユメカサゴ（のどぐろ）	横ばい	横ばい
	キチジ（あかじ）	減少	減少
	マアナゴ	減少	横ばい
	マトウダイ	減少	横ばい
	増加合計	1	4
	横ばい合計	6	8
	減少合計	9	4

3 スルメイカの日齢査定結果について

茨城県では、長年底曳網によるスルメイカの不漁が続いていましたが、R7年漁期（R7年9月～R8年6月）の漁獲量は650トン（前漁期72トン）と大きく増加しました（図1）。これを受けて、水産試験場ではスルメイカの市場調査や着底トロール調査を重点的に行ってきました。この結果、今年度漁獲されたスルメイカの体の大きさ（外套背長）の分布に2つの山が見られたことから、同時期に孵化時期の異なる個体が混在している可能性に着目しました（図2）。

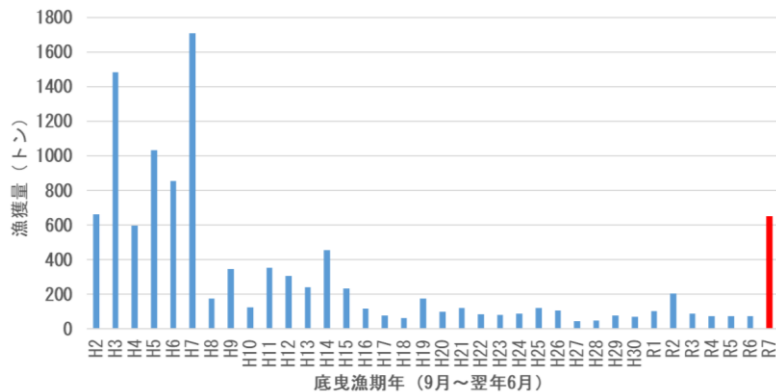


図1. 茨城県におけるスルメイカの漁獲量

（属人集計 小底5t以上+沖底）

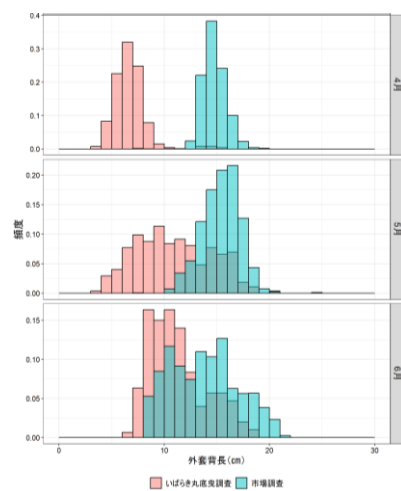


図2. R8年度に漁獲されたスルメイカの外外套背長組成

スルメイカの体内にある平衡石という硬組織を取り出して磨くことで、日輪という孵化日から一日一本形成される輪紋が観察できます（図3）。この日輪を数えることで、本県沖で漁獲されたスルメイカが生まれてから漁獲されるまでの日数（日齢）と孵化日を調べることが可能です。水産試験場では「いばらき丸」による着底トロール調査及び市場調査で得られた403個体を対象に孵化日を推定しました。

その結果、外套背長組成と同様に、孵化日の分布は2つの群に分かれました。各群に分類した個体の平均孵化日は、それぞれR7年10月16日頃（秋生まれ群）と、R8年1月9日頃（冬生まれ群）でした（図4）。また、同じ日齢でも秋生まれ群の方が冬生まれ群よりも外套背長が大きい傾向が確認されています。

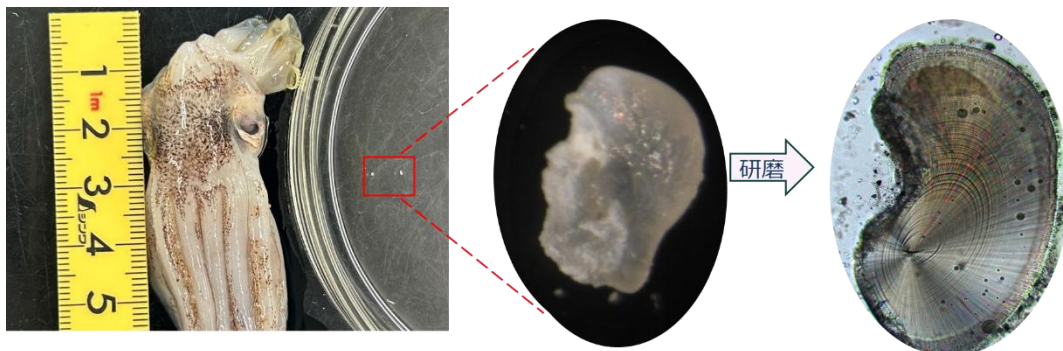


図3. スルメイカの平衡石と研磨により観察される日輪

茨城県では従来、冬生まれのスルメイカを主体に漁獲していると考えられていましたが、秋生まれの個体も多く漁獲されていることが明らかになりました。水産試験場では本県で漁獲されているスルメイカ資源の現状をより正確に把握するために、引き続き調査研究を続けていきます。

（定着性資源部 多賀・谷中・外山・西）

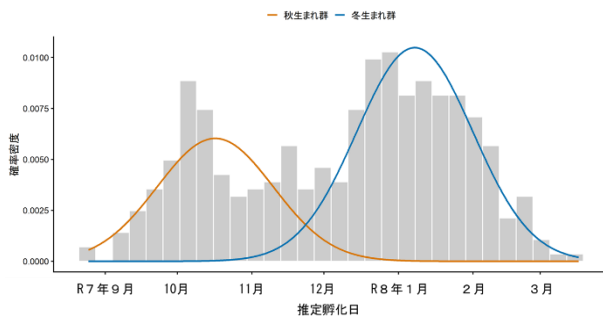


図4. R8年に漁獲されたスルメイカの日齢分布

【次回予告】

令和8年10月9日発行の水産の窓は「令和8年10月の海況と今後の予測」を予定しています。